

1 テーマ設定の理由

生活の視点でかかわりを生かすためには、論理的な思考などの資質をはぐくむだけでなく、様々な場面で人やものとのかかわりを生かしていかなければならない。学ぶ力、考える力などをどのように生かすかという視点で、経済性や現実性などを加えて考えると、技術・家庭科は、それらを生活にかかわらせるために重要な位置を占めていると考えられる。したがって生活の視点でかかわりを生かした授業が必要となる。そこに実践的・体験的な面からかかわりを見いだす活動を取り入れることで、新学習指導要領の目標である生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てることができると考えた。また、生活について未来への見通しをもち、勤労観や職業観も含めて考えていく視点も必要ではないかと考えた。そして、それらのかかわりを生かしていく中で、生徒の意欲を高めていく学習を組み立てることが課題であると考え本主題を設定した。

技術分野では、かかわりを生かして力をのばす授業の工夫という副題で研究を進めていく。本校で研究を進めてきた「かかわり」を生かすためには、かかわりを生徒自ら発見できることが必要不可欠である。そのためには、単に情報を集め、それを利用するだけでなく、集めた情報をもとに、学習者自らが利用方法を工夫し、生きた知識として再構成していくことが必要である。これらの力を「かかわりを生かしてのばす力」と本研究では位置づけ研究を進めたいと考えている。また、学習したことを書いたり、考えたり、まとめたりすることや、それらを他者に伝える力をはぐくんでいくことで、より効果的な学習成果を上げられるのではと考えている。新学習指導要領では、ものづくりを支える能力などを一層高めるとともに、よりよい社会を築くために、技術を適切に評価し活用できる能力と実践的な態度の育成を重視し、目標や内容の改善を図るとされている。また、ものづくりを支える能力などの育成を重視する視点から、創造・工夫する力や緻密さへのこだわり、他者とかかわる力(製作を通じた協調性・責任感など)及び知的財産を尊重する態度、勤労観・職業観などの育成を目指した学習活動を一層充実する。また、技術を評価・活用できる能力などの育成を重視する視点から、安全・リスクの問題も含めた技術と社会・環境との関係の理解、技術にかかわる倫理観の育成などを目指した学習活動を一層充実する、と書かれている。

本研究は、上記のものづくりを支える能力などの育成を重視する視点から、創造・工夫する力や緻密さへのこだわりを追求するために、自らの行動結果を観察、記録、考察させていくなかで、「学びにつながるエラー」から学ぶ姿勢を育て、「かかわりを生かして力をのばす」ことを目標とする。

家庭分野では、平成17年度より、研究テーマを「生活の視点でのかかわりをみいだす、技術・家庭科の指導」とし、3年間継続研究を行ってきた。その中で、1枚ポートフォリオを題材のまとまりごとに作成し、学習履歴を振り返りながら学習を積み重ねることで、生徒自らかかわりを見いだすことが可能となり、生徒の学習意欲を高め、生活実践力へとつなげることができたことは大きな成果である。さらに、かかわりを見いだすための手だてとして、ウェビング法を用いることで、発想が広がり、様々なかかわりを見いだす方法の1つとして大変有効であることも確認できた。また学びの見取りの1つの方法として、ルーブリック評価を導入し、ワークシートなどでは見取りにくい実習場面について活用することを検討してきた。そこでは、生徒が自己のレベルをより客観的に自己評価できるように評価項目の具体的な表現を工夫することにより、生徒が自分自身の状況を判断することが容易となり、より多面的・多角的な評価を行うために大変有効であることが示唆された。

また、平成20年3月に告示された新学習指導要領の中学校技術・家庭「家庭分野」の改善の具体的事項においては、中学生としての自己の生活の自立を図り、子育てや安らぎなどの家庭の機能を理解するとともに、これからの生活を展望し、課題をもって主体的によりよい生活を工夫できる能力と態度の育成を重視している。そこで、本研究では、これまでの研究で積み上げてきた様々なかかわりを見いだすための題材設定や学習法、評価法などを踏まえ、新たな時代の家庭科授業創造に向けて、研究を進めていきたいと考え、本テーマを設定した。

【技術分野】

2 研究の目的

研究目標 かかわりを生かして力をのばす授業の工夫

(1)研究計画

1年次 かかわりを生かして力をのばす授業の工夫点のあらいだし

2年次 かかわりを生かして力をのばす授業の実践

3年次 かかわりを生かして力をのばす授業の研究の評価

(2)研究の経緯

一昨年度は、コンピュータと生活とのかかわりや、コンピュータはどのようなはたらきを持っているかといった内容を学習しながら、コンピュータが生活の中のどのような場面で、どのように利用されているか、その仕組みは何なのか、といったことを、プログラム学習を通して生徒の理解を促そうとした。そして、コンピュータが「わかる」・「できた」をより多く導き出せるかを研究の成否とした。そして、これまでの課題等から、

①トライ&エラーを積み重ねて学習を進めていくスタイルを取り入れる。

②グループ学習から個別学習への流れを整える。

③個人の学習の成果を全体に還元させる。

について研究を進めているが、生徒が「できた」という達成感を得るためには、「できそう」から出発していくことが必要である。そして、生徒が「できそう」から「できる」までの変容を「学びにつながるエラー」から読み取り、成功を導き出すために有効活用しながら、より生徒の関心・意欲を高める授業作りに取り組みたい。

3 本年度の研究 「かかわりを生かして力をのばす授業の工夫」(2年次)

～かかわりを生かして力をのばす授業の実践～

生徒が学習した内容と、もともと持っている知識や技能を、学習活動によって新しい知識や技能と組み合わせ、総合的な実践力として実生活に活用できるよう、基礎的な知識と技術を確実に習得させ、組み上げていくことが大切であると考えた。そこで生活に生かし、さらには工夫していくことができるような題材を設定することが必要であると考え、実践してきた。

本研究でいう「かかわり」とは、さまざまな「かかわり」を、既知の学習などから見つけ出し、課題解決に結びつけている力とする。さまざまな「かかわり」とは、知の再構成を進めるために学習者がすでにもつ世界と新たに出会う世界との「かかわり」ととらえる。そこで、今までの自分が理解していたことや知っていたこと、やってきたことと新たに学んだこととの「かかわり」を意識させる。そのためには、考えることを習慣とし、書き留めていくことを継続していくことができるような教材づくりが必要となると考えた。

生徒がエラーととらえる場面には、基礎的・基本的な間違いや、設計ミスに起因するもの、単なる勘違いなど様々なレベルのものが考えられる。生徒がイメージしていたものと結果にずれや異なった場面に、問題や課題に気づく場面があり、教師の指導のポイントがある。ここでは、どこをどうなおせばできるようになるのかという「かかわり」を意識させ、これくらいでいいだろうという気持ちを起こさせないための情報の提示と生徒の理解の確認が必要となる。今年度は、昨年までの研究で課題として、師範について・治具等の有効活用を中心に研究を進め、生徒がより積極的に題材にかかわっていけるようにしていきたい。このときに、言語活動を意識的に行わせ、生徒の意欲を生徒自身の活動から高めることができるかを併せて検証事項としたい。

ここで、エラーの種類を分類すると、

A 知識にかかわるエラー

①基礎・基本的な事項にかかわる失敗。明らかな失敗。

②知識を活用していく中で起こるより高度なエラー

B モチベーションにかかわるエラー

①自己管理にかかわる問題

②課題設定にかかわる問題

C 探究による(のための)エラー

探究活動による課題追求場面 いわゆる試行錯誤の場面

に分けることができる。A①やB②が起りやすい授業では、基礎・基本的事項の習得も得られにくく生徒の関

心を高めることが期待できないので、これらが起こらない環境を整えることも重要な課題である。

4 今年度の成果と課題

昨年度から新たなテーマで研究を進めてきた。「かかわりを生かして力をのばす授業の工夫」を考え、工夫点をあらいだしていく中で、授業内での教師の師範が重要であることを再確認できた。技術（技能）を生徒に伝える際、教師の見せ方・進め方によって違いが出てしまう。本校の研究の柱のひとつである言語活動を意図的・意識的に学習場面に効果的に取り入れ、見せる・考えさせる・まとめさせる過程を経ることにより、知識や技能の定着をはかることができた。

治具については、ごく簡単な仕組みのものでありながら、のこぎりびき、かんながけ、釘の下穴あけなどといった様々な作業において、効果的、効率的な作業が得られるかを、比較させながら使用させることで、生徒自身が有効性を確認することができた。このことから、作業においても創意・工夫が必要であると考えさせるきっかけとすることができたと考える。

言語活動については、自らの考えを表現する、他者に伝える、他者から受け取ることについて、「学びにつながるエラー」のプリントを通して取り組んできた。掲示板で交流を図ることもあわせておこなうことで、活動の意欲が高められることも確認できた。生徒どうしの情報交換を活発にさせることで、基礎・基本的な事項にかかわるエラーを発生させにくくすることができ、生徒のアドバイスから問題を発見できる機会が増えたことで、教師の指導を待つ時間が減り、モチベーションを維持できた。

来年度は、効果的な師範方法について研究をすすめ、課題解決のための情報をどのように提示し、生徒自らの行動・活動につなげていくことができるかを確認したい。課題解決のための情報をもとに活動のポイントを確認しているか。教師や他の生徒からの情報や自分自身の活動を、整理・分析することができているか。自分の知識や技能を引き上げるために自主的に活動しているか。これらについて分析しながら研究のまとめとしたい。

5 参考・引用文献

中学校学習指導要領解説—技術・家庭科編—平成11年9月文部省
文部科学省ホームページ(<http://www.mext.go.jp/>)
技術・家庭学習指導書技術分野 開隆堂
観点別学習状況の新評価基準表 図書文化

6 具体的な実践事例

1年3組技術家庭科（技術分野）学習指導案

指導者 石田 剛士

1 ユニット名 机引き出しをつくろう

2 ユニットについて

(1)題材観

学習机という誰もが学校生活の中で一番多く接する機会のある用具を対象とすることで、学習を進める間の関心を保ちやすくなると考え、机の中に入れることができる引き出しづくりを設定した。また、基本的な箱形を作ることで加工に必要な事項等の学習要素を押さえることができると考えた。

(2)指導観

基本的な工具の利用については、技術分野では、ただ切るのではなく、どのようにすると切断しやすいか、効率よく作業を進めることができるか、設計通りの加工をしているかといった作業の確かさが大切な要素であると考え。繰り返し作業を続け、エラーを発見・記録・考察をしていくなかで問題を発見・予測し、修正・回避に活用する力を高めたいと考えた。このことから、エラーを深くまで見通しているか、どこまで先を見通しているかといった、精度の追求といった深まりや、エラーを予想し回避するといった力を生徒がつけることができるような教材設定が必要となる。作業を進める中で、生徒一人一人が自分にはどのようなエラーがおこりやすいか、同じようなエラーを他の人はどのように修正しているか、といったこと等を確認しあう事も、自分の行動や考えを深め、「かかわり」を求めていく動機になると考え、学習に取り入れている。

3 全体研究、教科テーマとのかかわり

今時の授業での「かかわり」とは、既存の学習内容から、自分に該当する部分を発見し課題の解決に向かおう

という判断や、また、それらを応用して課題の解決に結びつけようとする思考などの要素で構成される。自らの行動を観察、記録、考察することで、知識と技術を結びつけ、再構成しようとする活動を「かかわり」とし、これらをはぐむ態度を育てる。課題解決につながる問題点を発見する機会である「学びにつながるエラー」を、必要不可欠なものにとらえ、エラーを観察・記録・考察した結果から、「できない」から「どうしたらできる」、「できる」につながる生徒の活動を教師の評価に結びつけていく。

4 指導計画 (全20時間)

※網掛けが本時 (2 / 3)

番号	項 目	時数
1	製図	4
2	設計	2
3	罫書き木取り	2
4	部品加工	6
5	仮組み	1
6	組み立て、仕上げ (本時)	3
7	製作のまとめ	1
8	技術とものづくり	1

5 指導目標

- ア 技術が生活の向上や産業の発展に果たしている役割について考えさせる。
- イ 使用目的や使用条件に即した製作品の機能と構造について考えさせる。
- ウ 製作品に用いる材料の特徴と利用方法を知らせる。
- エ 製作品の構想の表示方法を知り、製作に必要な図をかくことができるようにする。
- オ 材料に適した加工法を知らせる。
- カ 工具や機器を適切に使い、製作品の部品加工、組立て及び仕上げができるようにする。

観点別評価規準表

	項 目	ア生活や技術への関心・意欲・態度	イ生活を工夫し創造する能力	ウ生活の技能	エ生活や技術についての知識・理解
評価規準	A (1)	生活や産業の中で用いられている技術に関心を持ち、技術が果たしている役割や、環境・エネルギー・資源について考えようとしている。	技術を適切に使う方法を工夫している。		技術と環境・エネルギー・資源との関係に関する知識を身に付け、技術のあり方について理解している。
	A (2)	身の回りの生活を向上させるための製作品を構想することに関心を持ち、製作するために必要なことを図で表示しようとしている。	使用目的や使用条件に即した製作品を構想し、その設計について工夫し創造している。	目的とする製作品を設計することができる。	製作品の構想の表示方法に関する知識を身に付け、設計時に必要な材料の性質や機能及び構造について理解している。
	A (3)	加工技術に関心を持ち、目的や条件に応じて、工具や機器を適切に活用している。	材料の特徴と加工の目的に応じて、工具の仕組みを生かした使い方を工夫している。	製作の目的と製作品に用いる材料に適した加工を行うことができる。	加工技術に関する知識を身に付け、工具の仕組みについて理解している。
	A	製作品の設計と製作を通して、必要に応じて適切な手だてを行おうとしている。	目標・条件に応じて設計を工夫したり、工具の仕組みを生かして使い方や手順を工夫している。	目的の製作品を設計し、材料を適切に加工できる。	設計や製作に関する知識を身に付け、性質や仕組みについて理解している。

評価規準 具体の		③自ら構想したものの形を図で表すために工夫している。	④工具や機器を安全に使用できる。	⑦加工の目的や材料に適した加工法に関する知識を身に付けている。
-------------	--	----------------------------	------------------	---------------------------------

6 本時の授業

- (1) 日時 平成21年7月4日(土)
- (2) 場所 技術室
- (3) 題材名 机引き出しを作ろう
- (4) ねらい 適切に工具を選択し、使い方を工夫しながら、組み立てを行うことができる。
- (5) 本時の指導と評価計画例

机引き出しを作ろう

本時の評価規準

関意態	工創	技能	知理	A 十分満足できると判断される状況	B おおむね満足できると判断できる状況	C 努力を要する生徒への支援	評価方法
	④			加工の目的や条件に応じて、より適切な工具等を選択し、その使い方を上手に組み合わせるなど工夫している。	加工の目的や条件に応じて、より適切な工具等を選択し、その使い方を工夫している。	必要な情報の確認と、指導・助言。	学習プリント 授業観察
		③		組み立てを正確に行うことができる。	組み立てをすることができる。	つまずきの確認と、指導・助言。	学習プリント 授業観察
			⑦	加工の目的や材料に適した加工法に関する知識を身に付け、適切に利用している。	加工の目的や材料に適した加工法に関する知識を身に付けている。	必要な情報の確認と、指導・助言。	学習プリント 授業観察

(6) 本時の展開

段階	時間	学習活動	教師の指導・支援	備考
導入	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の目標を確認する。 ○ 底板の取り付けを行うことを知る。 ○ 「学びにつながるエラー」から学ぼう、「底板を取り付けよう」のプリントを随時記入しながら学習を進めることを知る。 ○ エラーを回避するための事項を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 底板の取り付けを行うことを知らせる。 ○ 「学びにつながるエラー」から学ぼう、「底板を取り付けよう」のプリントを随時利用させる。 ○ 間違いやすい事例を前回の学習をもとに確認させる。 ○ 底板の裏表の打ち間違い、ボンドの塗り忘れ、釘打ち方法(A①)についてエラーを起こさないように徹底しておく。 ○ モチベーションを高め、最後まで課題を追求する姿勢を求める。(B①) 	学習プリント発問 課題解決のために必要な情報提示
展開	5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 底板を枠とあわせる。 ○ 底板と枠があっているか確認し、ずれている場合には、ずれの状態を確認し、修正法を考える。 ○ 状態を確認し、必要に応じて底板にけがき線を入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 底板と枠をあわせ、比較させる。 ○ 底板と枠があっているか。あっていない場合にはどのようにずれを修正するか考えさせる。(A②) ○ 条件を提示し、必要な生徒には底板にけがき線を入れさせる。裏表を間違えてつけないように注意させる(名前を見て釘打ち)(A①) 	さしがね

	10	<ul style="list-style-type: none"> ・ 底板の加工をする。 ○ 必要に応じてかんなどを使い、けがき線まで削る。 ・ 枠の加工をする。 ○ 必要に応じてかんなどを使って削る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 底板の加工をさせる。 ○ 必要に応じてかんなどを使わせ、加工させる。必要以上に削ってしまわないように十分注意させる。(A①) ・ 枠の加工をさせる。 ○ かんなどを使わせて加工させる。底板とのあわせを確認させながら行わせる。 	<p>学習プリント発問実演</p> <p>課題解決のために必要な情報提示</p>
<p>技能</p> <p>知理</p> <p>工創</p> <p>かかわりを生かす活動</p> <p>知理⑦</p>	20	<ul style="list-style-type: none"> ・ 枠に底板を打ち付ける。 ○ 木工用ボンドを丁寧に薄くのばして枠に塗る。 ○ 枠を底板にあわせて、前板部から釘打ちさせる。このときに、底板と枠をしっかりとあわせながら作業を進める。 ○ さしがねで直角に枠が固定されているかできたか確認する。 ○ 加工の方法や精度について考え、プリントに記入しながら加工していく。 ○ 自己診断を行い、加工を進める。 ○ 「学びにつながるエラー」から学ぼう」のプリントに書き加えながら進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 枠に底板を打ち付けさせる。 ○ 木工用ボンドを丁寧に薄くのばして枠に塗ることを知らせる。まんべんなく塗ることで、強度が得られる事の確認。(A②) 基準面の確認 (A①) ○ 底板を削った生徒には底板の基準面の確認をさせる。(A②) ○ 枠を底板にあわせて、前板部から釘打ちさせる。(C) このときに、底板と枠をしっかりとあわせながら作業を進めることに留意させる。(A①, ②) ○ さしがねで直角に枠を固定させる事ができたか確認させる。(A①) ○ 加工の方法や精度について考え、自己診断をさせながら、加工を進めさせる。(C) ○ 「学びにつながるエラー」から学ぼう」のプリントに書き加えながら進めさせる。(B) 	<p>学習プリント発問実演</p> <p>課題解決のために必要な情報提示</p> <p>かかわりを生かす活動</p>
まとめ	10	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時で考え、記入したことを発表する。 ○ 「学びにつながるエラー」から学ぼう」のプリントに記入したことをもとに発表する。 ・ 次回の授業について知る。 ○ 次回の授業について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の授業で考えたことを発表させる。 ○ 「学びにつながるエラー」から学ぼう」のプリントから考えたこと等を発表させる。(B①) ○ まとめる時間をあたえる。(B②) ・ 次回の授業について知らせる。 ○ 次回はやすりがけを行うことを知らせる。(B②) 	<p>次回へのかかわり</p>

【家庭分野】

2 これまでの研究経過

- 平成17年度～19年度 「生活の視点でのかかわりを見いだす、技術・家庭科の指導」
- 平成17年度 1年次 生活の自立を支援する学習内容の工夫と評価①
- 平成18年度 2年次 生活の自立を支援する学習内容の工夫と評価②
- 平成19年度 3年次 生活の自立を支援する学習内容の工夫と評価、成果と課題
- 平成20年度～ 「これからの生活を展望できる学習内容の工夫」

3 今年度の研究内容

新学習指導要領への移行期1年目となる今年度は、まず「A 家族・家庭と子どもの成長」において、これまで興味・関心に応じた内容であった「幼児との触れ合いとかかわりの工夫」「高齢者などの地域の人びととかかわり」が、すべての生徒が履修する内容に改められ、さらに家族関係や幼児の生活に関する課題選択学習が設けられたことを踏まえ、「A 家族・家庭と子どもの成長」の実習題材を扱いたい。

研究を進めるに当たっては、生徒の記述を中心とした事前事後調査とともに、授業ごとに「振り返りカード」による記述を積み重ね、それらの質的データを分析するという、質的研究法を取り入れたい。

質的研究は、“何を” “どのように” という現象それ自体を志向する問い（質的な問い）に対して有効な研究方法とされ（澤田・南, 2001）、その場に生きる人々にとっての事象や行為の意味を解釈し、その場その場のローカルな状況の意味を具体的に解釈し構成していくことを目指すものである。したがって、厳密に定義された既に決められた概念から出発するのではなく、問題をおおまかに示す自由度の高い「感受概念」を出発点とし、そこから個別具体的な記述による発展をねらうものである。つまり、実証データからその概念に新たな面がつけ加えられ、理論がつくられる。データ収集と理論形成や何を問うかの明確な追求が同時に行われるというのが大きな特徴である（秋田, 2007）。

本研究は、新学習指導要領における新たな授業開発を目差すものであり、したがって、質的な検証を丁寧に行うことは、これからの家庭科授業を創造するための手がかりとなるであろう。

4 実践事例 第2学年2組 技術・家庭科（家庭分野）学習指導案（略案）

- (1) 日時 平成21年7月4日（土） 9:40～10:30
- (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 南館2階 家庭科室
- (3) 題材名 「幼児とのふれあい交流学習②」～幼児と一緒におやつを作ろう～
5/6時間目
- (4) ねらい・対象児の発達や特性を考え、触れ合いやかかわり方を工夫することができる。
・対象児の生活に関心をもち、課題をもって対象児にふさわしいおやつをつくることできる。
- (5) 本時における評価の計画

規準	十分満足できる状況	おおむね満足できる状況	努力を要する生徒への支援
ア④	◎幼児との触れ合いに関心をもち、取り組み、課題解決への見通しをもって幼児と適切にかかわろうとしている。	○幼児との触れ合いに関心をもち、取り組み、幼児と適切にかかわろうとしている。	△左の基準に達しないもの これまでの学習を振り返らせ、 班で決めた役割を確認させる。
イ③	◎幼児の個性や発達の特性に応じて、かかわりの予想や予定を幼児に合わせて修正しながら、自分なりの工夫をしたり新たな方法を考えたりしている。	○幼児の発達に応じて、幼児との触れ合いやかかわり方について、自分なりの工夫をしたり新たな方法を考えたりしている。	△左の基準に達しないもの 幼児の反応を確認しながら、 修正が必要な場合は声をかける。

(6) 6時間の流れと評価の計画

時間	学習活動・ねらい	ア 関 意 態	イ 工 創	ウ 技 能	エ 知 理	評価対象 など
1・2	対象児の特徴を知り、対象児にふさわしいおやつづくりの計画を立てよう ・対象児の発達段階や特性、保護者の願いを知り、対象児の喜ぶおやつづくりの計画を立てることができる。	③				ワークシート 観察
3	対象児にふさわしいおやつをつくってみよう ・対象児のためのおやつを工夫して製作することができる。 ・製作したおやつを評価し、改善点を考えることができる。	③	②	③		ワークシート 観察 作品
4	触れ合い交流会の準備をしよう ・幼児が喜ぶ交流会の準備ができる。		②			観察
5	幼児との触れ合い交流学習②～幼児と一緒におやつをつくろう～(本時) ・おやつづくりを通して、対象児と積極的に触れ合うことができる。 ・対象児の発達段階や特性に応じて、かかわり方を工夫することができる。	④	③			ワークシート 観察 作品 振り返りカード
6	交流学習を振り返ろう ・ふれあい交流会から学んだことをわかりやすくまとめ、発表することができる。			②		ワークシート 観察 発表内容

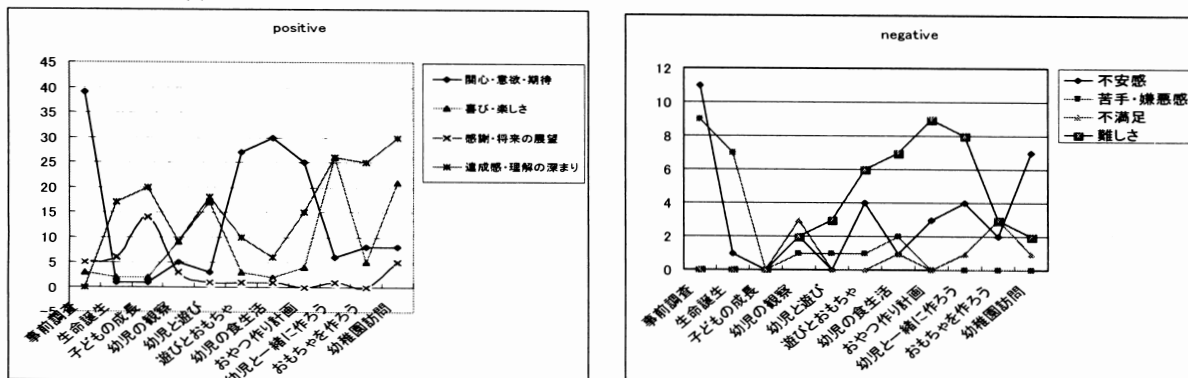
(7) 展開

過程	学習活動及び生徒の活動	教師の支援	指導上の留意点・評価
課題の把握 5	①本時のねらい、注意事項を確認する。 ②班ごとに対象幼児を迎えに行き、座らせる。	・本時のねらいを確認させる。 ・活動上の諸注意、衛生面や安全面への配慮についてまとめたものを掲示し、確認させる。	・幼児は幼稚園担任・長谷部先生の引率で来校し、教室に入って待機している。 ・対象児は1班2名
課題の追求 35	③幼児と一緒におやつづくりを行う。 ・幼児と一緒にできることのみを短時間で行い、加熱等の時間を利用して簡単な遊びを行う。 例；紙芝居 色紙遊び お絵かき など ・テーブルクロスなど、試食の準備を行う。 ④試食 ・班ごとに幼児と楽しく試食しながら、適切に幼児と接する。 ・楽しく試食ができるように班ごとに工夫する。 ・食べ終わったら食器等を調理室に片付ける。	・各班の計画に沿って進めさせる。 ・安全面や衛生面に十分留意させ、身支度を整えて手を洗ってから調理に入らせる。 ・火の扱いに留意させる。 ・各班の進行状況を確認し、必要に応じて机間指導を行う。 ・幼児の反応を確認しながら、修正が必要な場合は声をかける。 ・時間を意識させるように声をかける。 ・楽しく試食が行えるように助言する。	【評価】ア④ 観察 【評価】イ③ 観察
まとめ 10	⑤感想発表を行う。 ⑥幼児と別れのあいさつをする。 ⑥振り返りカードとワークシートの自己評価欄を記入する。	・生徒だけでなく、幼児、幼児の保護者にも感想を聞く。 ・幼児は保護者のもとに戻る。 ・学習のまとめを行う。	・ワークシート ・振り返りカード 【評価】ア④ イ③ ワークシート 振り返りカード

範囲でおやつづくりに参加したことで、少し自信がでてきたように思います。家庭内や幼稚園では経験できないような体験をさせていただき、感謝いたします。

またこのような機会があれば、ぜひ参加させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

質的データの分析



ポジティブな表現を授業ごとに見ていくと、まず「生命誕生」「子どもの成長」では、胎内での人間の成長と誕生を学び、自分自身のこれまでの成長を振り返るため、＜理解の深まり＞＜親への感謝＞といった記述が中心であるが、幼児との交流を踏まえた「幼児と遊び」「遊びとおもちゃ」「幼児の食生活」に入ると、＜関心・意欲・期待＞が高まり、実際に交流すると、＜達成感・理解の深まり＞＜喜び・楽しさ＞の記述が多くなっていった。

ネガティブな表現を見てみると、事前調査と「生命誕生」の授業で見られた＜苦手・嫌悪感＞は、学習が進むにつれてほとんどなくなり、対象児の嗜好や親の願い、幼児のおやつを考えた「おやつづくりの計画」や「幼児と一緒に作ろう」では、＜不安感＞や＜難しさ＞の記述が増えていた。「おもちゃを作ろう」では＜難しさ＞の記述はほとんどなく、対象児に合わせておやつを考えるという課題は、これまで行ってきたおもちゃづくりより難しく、その分＜達成感＞＜喜び＞も大きい課題であったと言えるだろう。

5 まとめと今後の課題

公開研究会のまとめ、質的データの分析結果から、「幼児の生活と家族」における今年度の交流学习は、「幼児との交流」が必修となるこれからの家庭科の方向性を考えると、相互性のある有意義な交流ができたと言えるだろう。しかし、「かわりを見いだす活動」としては、もう少しワークシートやまとめ方を工夫する必要があるだろう。また、今年度は校舎改修工事等の関係で先を見通すことが難しく、計画通りに進まない面も多かった。来年度以降年間指導計画をしっかりと整え、学習全体が見通せるような1枚ポートフォリオ等の活用も考えていきたい。さらに、今年度は後期に入り新型インフルエンザの影響で、前期と同様の交流はできなかった。様々な状況に対応できるような計画を作成しておくことも重要であると感じた。

6 来年度の方向性

今年度の研究である幼児との交流学习は来年度も引き継ぎ、今年度の課題を踏まえて継続していきたいと考えている。

しかし、来年度は公開研究会が11月に戻る予定であるので、インフルエンザ等の事態も考慮し、別の領域の教材開発を考えたい。具体的には、今年度山梨県総合教育センターの研究協力校として清田先生に授業をしていただいた「地域の伝統と文化」の領域や、大学院で志村先生から学んだ消費者教育・シティズンシップ教育等、協力員の先生方からのご意見をうかがう中で決定していきたい。

また、今年度は様々な機関と連携し、附属中の授業を提供したり、附属中で行った授業を分析していただいたりすることで、自分自身多くを学ぶことができ、よりよい研究を行うことができた。今後も可能な限り、様々な機関と連携を図り、新しいことに挑戦していきたい。

【引用・参考文献】

中学校学習指導要領解説 一技術・家庭科編一 平成20年9月 文部科学省
 これからの授業に役立つ新学習指導要領ハンドブック 中学校技術・家庭科（家庭分野）
 河野公子 他 平成20年7月 時事通信社
 ウェッジング法 一 子どもと創出する教材研究法 一 広島大学附属小学校
 関 浩和 著 平成15年7月 明治図書
 はじめての質的研究法 教育・学習編 秋田喜代美 他 編著 平成19年7月 東京図書